

## 関西大学独逸文学会研究発表概要 (第105回研究発表会)

### 1. Heimatfilm としての映画 *Soul Kitchen*

藤田 恵莉

ドイツでは移民の数が増えたことに伴い、彼らが様々なメディアで扱われるようになってきている。特に、映画においては80年代頃まではドイツ人が描く典型的な移民の描写（ガストアルバイターなど）が主立っていたが、近年では移民の監督による移民を題材にした映画が多くみられる。

そういった監督の一人であるファティ・アキンは、移民の背景を持つトルコ系ドイツ人の映画監督であり、彼の作品はいずれも移民の登場人物を中心に描かれている。また彼の作品は国際的にも評価を受けており、今までカンヌ国際映画祭などで様々な賞を受賞している。そして彼の最新作 *Soul Kitchen* は、ハンブルクのレストランが舞台のコメディ映画である。

この映画について具体的に焦点を当てるのは、彼がインタビューの中でこの映画を「この映画はHeimatfilmだ」と述べている点である。Heimatfilm とは、ドイツにおける映画のジャンルのひとつであり、ドイツで50年代に最も流行した映画ジャンルである。しかし、この50年代に流行した Heimatfilm とは、ドイツの田舎を舞台にしたドイツ人が主な登場人物の映画であり、一見しただけでは *Soul Kitchen* が Heimatfilm であるとは言い難い。

しかし Heimatfilm の3つの特徴（①登場人物、②舞台、③ストーリー）と比較してみると、③のストーリーにおいては共通点が見られた。登場人物と舞台が従来の Heimatfilm と異なっているため、一見しただけではわからないが、ストーリーの展開自体は従来のものと同じなのである。

## 2. 間接話法の独英比較

——『トニオ・クレーガー』を中心に——

川邊 崇史

小説であれ、報道記事であれ、語りが展開される場面で間接話法は重要な機能を担っている。本発表では、間接話法に関してドイツ語と英語を比較し、両言語における語りの手法を考察した。

まず Duden „Grammatik der deutschen Gegenwartssprache“ と “A comprehensive grammar of the english language” の記述から、文法理論の整理を行った。Duden では間接話法は接続法の機能領域に含まれているのに対し、“A comprehensive grammar” においては独立した Reporting the language of others (他人の発言の報告) という章で説明され、そこでの言語手段は直説法である。英語の間接話法において仮定法が使われないことはドイツ語との大きな違いといえる。

次に、上記のような違いが実際の語りにおいてどのような影響を及ぼしているかを明らかにするため、トーマス・マンの作品である『トニオ・クレーガー』を取り上げ、ドイツ語オリジナルと二種類の英訳版を比較考察した。まずドイツ語の原文から動詞の語形を振り所に接続法を拾っていき、さらにその中から間接話法のみを抜粋し、それらに対応する英語訳を照らし合わせて観察した。その際英語では that の使用、that 節から違う形式 (分詞構文、SVOC、to 不定詞等) への変換、コロン (:) による that の代用、時制の一致など、仮定法を使えないことからくると思われるいくつかの興味深い現象が見られた。なお、間接話法の文体的特徴を持つ体験話法の比較も行ったが、ドイツ語も英語も直説法過去の動詞を用いるので、間接話法と違って大きな違いはなかった。

## 3. ドイツの Kriminalserien の歴史

崎山 円

ドイツのテレビでは毎日、Tatort をはじめとした多くの Krimi が放送されている。Krimi とは通常 Kriminalroman、もしくはテレビ放送されている Kriminalserien を指し、ドイツ人の間で長く親しまれてきたジャ

ンルの一つである。本発表では *Kriminalserien* の方に焦点を当てた。テレビドラマの放送が始まったとほぼ同時に、ホームドラマと並んで *Kriminalserien* は放送され続けてきた。そして今日もなお、安定した高い人気を博している *Kriminalserien* とは何か、また *Krimi* の中でもさらにどのようなカテゴリーに分けられ得るのかを検証しながら、*Krimi* の歴史とその発展を振り返った。その際日本のドラマとも照らし合わせ、ドイツ語“*Krimi*”を日本語に翻訳するにあたっての問題点も明らかにした。

#### 4.（講演）ゲーテ・レンツ交遊略史 —— ドイツ文学の一時代 ——

八亀 徳也

疾風怒濤時代を代表する二人の詩人、ゲーテとレンツが初めて出会ったのは、1771年6月、フランス・アルザスの州都ストラスブールで行なわれていた「哲学と文芸の会」においてであった。ゲーテは当地の大学で法律学を修める身、他方レンツは遙か東方のケーニッヒスベルク大学での研究を放棄し、二人の男爵兄弟の従卒の身分で周辺の駐屯地を転々としながらも、上記の会に積極的に参加する傍ら執筆を続け、ゲーテがこの地を去ってから、文通を重ね原稿を送りあうなどして親交を深め、二人の関係を「我々の結婚について」と表現するくらいの気分まで昂揚する。

両者の友情は、ゲーテの後を追うようにしてヴァイマル入りしたレンツが、1776年中の半年あまりの間に示した奇矯な行動、分けてもゲーテに対して犯した失礼な行為によって破綻する。これ以降レンツは、81年にモスクワに定住するまでドイツ、アルザス、スイス等を放浪し、79年に肉親の住むリーガに戻って就職活動をするも、ゲーテの感情を気遣う関係者にも協力を拒まれるが、唯一、レンツの帰郷の旅費を工面し合おうという慈善運動にゲーテも参加したとのエピソードは暫し心を和ませる。

ゲーテとレンツは、ドイツ文学の一時代を共に生きた、互いに異質の存在であったように、前者が数多くの名作により、死後も長く幅広く受容され続けているのに対し、後者は生き方の特異性、作品の現代性・問題提起性ゆえに、後世の作家・詩人たちによる多種多様の作品の中で主人公として描かれるという、こちらも長期的な受容を恣にしている。